



「継ぐ」 ～過去の実践に学びながら～

本コーナーの#16に、道川分教室の研究主題の変遷について載せています。研究は、自校の教育課題の解決につながる活動であると同時に、児童生徒の成長やその背景にある要因（授業づくり等）を形として示すものであると考えています。

次項に、少し長くなりますが平成24年度の研究紀要（研究 ゆり 第14号）のまとめの部分を抜粋し、載せます。

この年の研究成果として示された、「児童生徒にとって分かりやすい状況作りのある授業実践」のための4つの観点は、現在でも授業の評価や改善等の視点としており、道川分教室の授業づくりにおける大きな特色の一つです。

○言葉掛け「言葉が相手に伝わる状況作り」

- ・ 平穏な短い言葉、音環境への配慮等を行うことで集中して活動に向かう気持ち

○姿勢作り「取り組みやすい状況作り」

- ・ 身体の安定、視線や手を動かす等、自発的に活動する姿の育成

○教材・教具「意欲を喚起する状況作り」

- ・ 興味・関心のある事物の活用、提示物の精選等により、活動しよう、分かろうとする意欲の向上

○授業展開「見通しをもちやすい状況作り」

- ・ 授業構成の一定化、繰り返し、シンボルの活用等による、安心感、期待感の表出

参考：平成24年度 研究 ゆり 第14号

その他の年度の研究成果等も、現在の授業づくりに脈々と継がれ、よりよい授業づくりを支えてくれています。「授業づくり検討会」「教育的ニーズに応じた授業づくり」「個を生かす合同学習」「授業デザインや学習評価に関するツール」・・・

今年度の研究は、普遍として大切にしたい教師の基本姿勢も含め、これら成果を十分に生かした個別学習の授業づくりを事例としてまとめる、という内容で推進します。

道川分教室の実践が継がれ、子ども達の新たな笑顔につながることを期待しながら。



【個別学習】



【合同学習】



【H29ゆり支援学校（本校）との交流】

H24研究主題 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」 ～児童生徒の主観に迫る的確な実態把握とは～（1年次） ～自発的に活動する姿を育む状況作りとは～（2年次）

主題に迫るために、授業研究会やケース検討会、各種研修会を実施しことは、担任の独りよがりな実態把握や評価に陥ることなく、複数の意見や専門的な視点を生かした授業づくりにつながった。特に、全児童生徒の個別学習の授業提示においては、様々な教材・教具等を活用した授業展開が図られ、限られた学習環境の中でも工夫が垣間見えた授業が創り上げられた。そして、その授業を通し適切な指導の在り方について複数の職員で協議し合い、検証を生かしながら授業の改善を繰り返す実践の積み重ねが、担任と児童生徒の関係を「確かなもの」にし、生活の豊かさの「広がり」にもつながっていることをいくつかの事例からも確認している。それは、「児童生徒の内面に迫った実態把握から始まる授業づくりにより、伝わることの嬉しさを感じ、自分から伝えよう、アピールしようという気持ちの高まりにつながり、病棟に帰っても生かされている」という事例等である。

中京大学教授 鯨岡峻 氏が「教師がまず、子どもとどのように情動を共有するかがコミュニケーションの出発点であり、原初段階のコミュニケーションはむしろ情動の共有、つまり通じ合えた喜びを杖に動いていくものはずである。子どもの情動を受け止めて、そこに通じ合う関係を築くことが先決ではないか」と言っているように、児童生徒の内面に迫った関わりの中で通じ合えた喜びから信頼関係は深まっていくものなのだろう。そのためにも、児童生徒の気持ちを読み取れる教師の力量は重要なのだらうと思われる。だが、教師は児童生徒の気持ちを読み取れない、分からない、通じ合えないときもあるのではないだろうか。しかし、そんなときこそ、児童生徒を主体として受け止め、そばに寄り添いながら相手の気持ちを分かろうと見つけ、言葉を掛ける姿勢こそが重要なのではないだろうかと考える

この2年間の研究を通して道川分教室の教師は児童生徒の内面に迫ることを意識し、指導に当たってきた。児童生徒に言葉を掛けながら十分応答を待ち、また返すというやりとりをする指導の姿が明らかに増えた。それは、児童生徒の気持ちを読み取ろうとする意識の高まりの結果、自覚的に言葉を掛けながら気持ちに寄り添った姿の表れを考える。そのやりとりの中で作られた授業の積み重ねこそが、児童生徒と教師相互の変容や成長にも寄与したと考えたい。

（中略）

今後も道川分教室は重度・重複障害児の「自分の力で」という可能性を最大限引き出すことができるよう、児童生徒の気持ちに寄り添いながら職員間で知恵を出し合い、創り上げられる、練った授業実践を積み重ね、児童生徒と教師相互の成長を目指していきたい。